



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペ・エリ・ラヴロフ「歴史書簡」(翻訳) 2
Author(s)	松井, 茂雄; Matsui, Shigeo
Citation	スラヴ研究, 2, 113-134
Issue Date	1958
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4934
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113001.pdf



歴史書簡 -2-

ペ・エリ・ラヴロフ

松井茂雄訳

書簡 其の六

文化と思考

批判的に思索する個人が、自己を人類の進歩のための可能にして義務ある活動家であると自覚したものと仮定しよう。そうすれば、彼はこの自覚の名にかけて、進歩の現実的機関となるためには、いかに行動する義務があるかという問題が起ってくる。

勿論、先ず第一に、彼は自己に対して——自己の知識と自己の力量に対して——批判的態度を取らなければならない。彼の知識の及ばない活動舞台は、研究するか、さもなければ放置しなければならない。彼の力の及ばない事業は、それを成し遂げるだけの力がつくまでは、手を出さない方がよい。或る活動分野全体が、このように或る個人に閉ざされているという訳ではないが、然し彼は、この分野に手を出すに当って、次の問題を明瞭に提起し解決しなければならない、——私は、この分野で、自己の知識と自己の力によって、正に何を為し得るであろうか？ この問題を解決してはじめて、現実の課題を理性的に立て得るのである。

然し、これに着手するに当って、互に相反しているように思われる若干の学説が彼の前に現われる。そして、個人主義と社会性或いは友愛に対するルイ・ブランの有名な見解を御存じの読者は、私が歴史に於て個人に付与した大きな意義を知って、個人主義——かつて有名であったフランスの社会主義者がこれに付与したこの語の意味で——に対する偏向の点で、この書簡の著者に恐らく疑惑を持たれたことであろう。私はこの問題に長く止まるつもりはない。何故ならば、これらは実際上の問題であるというよりは、寧ろ言葉の上の問題であると考えているから。

ルイ・ブランは、次のように語っている（《フランス革命史》、パリ、1847年、第一巻、9-10頁）、《個人主義は、人間を社会の外に存在するものと見なし……彼の義務を指摘せずに、彼の権利の誇張された意識を彼に与え、彼を彼自身の力量のなすがままに任せて、あらゆる政府の代りに、laissez faire を宣言する》。更に彼は、個人主義は《無政府状態によって圧制へ導く》、と語っている。ルイ・ブランの《友愛》という言葉には、一定の概念以上に大げさな響が感ぜられる。然し、この原理に帰せられる志向——《将来、神の業である人体になぞらえて、人間の業である社会を組織する》という志向から分るように、友愛の原理が支配している場合の個人は、ブランの見る所では、個々の無意識的身体器官が意識的な人間的自我に従属していると同じ位に、社会の従属的要素である。ルイ・ブランが理解しているが如き個人主義は、彼の見地からする社会性が個性を具えた個人を社会の利害によって併呑する傾向を有しているように、全体の幸福を個人の利己的利害に従属させる志向であった。然し個人は、社会と自己を、等しく現実的でしかも利害を競い合う二つの原理と見なす時だけ、社会の利害を自己自身の利害に従属させる。全く同様に、社

会による個人の併呑は、社会がその諸目的を諸個人に於てではなく、何か或る他のものに於て達成し得るとする想定がある時だけ生じ得る。然し、これはいずれも幻想である。個人を離れた社会は、何等現実的なものを有していない。明瞭に理解された個人の諸利害は、個人が全体の諸利害の実現に努めることを要求する。社会的諸目的はもっぱら個人に於て達成され得る。それ故に、真の社会的理論が要求するものは、社会的要素の個人への従属でもなければ、社会による個人の併呑でもなくて、社会的利害と個人的利害の融合である。個人は、彼の利害に外ならぬ社会的利害の理解を深めなければならない。又彼は、真理と正義を社会的諸形態の中にもたらすことに自己の活動を向けなければならない。何故ならば、それは何等かの抽象的志向ではなくて、最も身近かな利己的な彼の利害だからである。この段階に於る個人主義は、個人の志向による全体的幸福の実現となるが、全体の幸福はこれ以外の方法では実現され得ない。社会性は、社会生活に於る個人的諸目的の実現となるが、個人的諸目的は他の何等かの環境では実現され得ない。

かくして、個人の現実の課題は、若し彼が批判的に思索する個人であるならば、彼の利害を社会の利害に対立させはしない。然し、進歩の条件のこれら二つの半面は一つずつ別個に完成され得るとも考えることが出来よう。個人の発達と個人による社会的諸形態への真理と正義の具現化とは、想像の上では別個のものとなし得る。そこで、さまざまな思想家がさまざまに解決してきた課題が生ずる。次の如き問題が生ずる、——人間は、彼を取り巻く社会的諸形態とは無関係に、個人的完成をその目的とし、且つ、社会的諸形態が彼の諸要求と一致する場合にのみ社会生活に参加することによって、主として自己の人間完成に努めなければならないのであろうか？ それとも彼は、その中で生活せざるを得ない社会的諸形態が極めて不満足であり、且つ、彼の活動が極めて取るに足らぬものであるにしても、現在と将来のために出来るだけ良い諸成果を所与の社会的諸形態から創り出すことに、主として自己の活動を向けなければならないのであろうか？

ひたすら一方のみに偏したこの二つの解決は、個人とその活動を歪めることになる。個人は、自己の道徳的理想を立てる際に、社会の生活の歴史的條件全部を、その全一性と多様性において考慮することは、決して出来ない。それ故に、個人の諸理想は、常に歴史的現実より遙かに高いであろうし、又高くなければならない。従って、個人は多くの場合、社会活動から遠ざかる理由を持つであろう。個人が、より発達し、より完成していればいる程、益々早く社会活動から遠ざかり、且つ、無益な皮肉をたたえ手を拱ぬいて、さまざまな出来事が次から次へとそれなりに進行してゆくさまを——つまり、彼より道徳的発達のおくれた諸個人が、それらの出来事を処理してゆくさまを——眺めることになるであろう、このような自己完成は、社会的無関心主義に異ならないであろう。然し、このことはそれ自体矛盾している。たとへ僅かでも社会悪を正し得た時に、そのそばを冷淡に通る過ぎ得る個人は、一切の現実的なものから遠ざかり、空疎な思考力とか、有名な諸法則のスコラ的で全く無益な蓄積とか、或いは神秘的な自己過大視以上の何ものをも、自己の中に発達させ得ない。加うるに、若しこの個人の生活している環境が、周囲のすべてに批判的態度を取るまでの発達を彼に可能ならしめたとするれば、この環境は、もはや絶対に悪い訳ではない。第二の者・第三の者もここで発達し得る、同一の諸条件が彼等に現われさえすればよい、即ち、最も拘束的・圧迫的な諸形態をこの環境に於て除去しさえすれば、ここ

ではより良きものが可能であり、若し個人がこのことを理解しないとすれば、彼が、自己自身を充分発達させず、唯発達しているように見えるにすぎないということになる。

然し、所与の社会的諸形態に完全に適応していると、知らず知らずの中に自己をこれらの諸形態に服従させてしまう。次第に少なくなってゆく自己の活動の成果に満足していると、終には成果が全くなくとも満足するようになる。かかる際に、社会活動家の落ち行く先は、輪の中を走る栗鼠・又は空の部屋で熱弁を振る雄弁家の極めて望ましからぬ段階である。自己の活動面で所与の水準以下に落ちてはならないということを内容とする個人的価値の要求を放棄すれば、個人は自己完成を放棄するだけではない、彼が社会に利益をもたらしているのか、それとも害悪を流しているのか、又彼がこの社会に生産者として生活しているのか、それとも寄食者として生活しているのかということ、判断する能力までも放棄するのである。

上述の二つの要求は、互に別ち難く結びついている。個人は、現実的なものの批判にもとづかずには、全面的に発達し得ない。現実的世界——自然の批判は、自他の活動の絶対的限界・抵抗しても無意味な不可避的諸法則を、人間に指し示す。現実的過去——歴史——の批判は、人間が他のあらゆる同時代人と共に立っている不可避的基盤——基盤そのものをそのあるがままの姿で考慮に置くという条件つきで改造を許容する基盤——を人間に評価させる。現実的社会的批判は、進歩に対する自主的志向を有する人々を、他人の思想で生活している人々や反動の擁護者共から区別し、主要な悪を第二義的な悪から、今日の問題を明日まで延せる問題から区別することを人間に教える。現実的自我の批判は、自己卑下と慢心をまじえずに自己の力を量り、自己の行為を決定することを、人間に可能にする。然し、これらすべての批判形式は、個人そのものの発達に外ならない。それと同時に、若し個人が本当に真剣に社会的苦悩と社会的諸問題に参加しないならば、若し彼の批判が有益な活動の端緒とならないならば、これらの批判形式は不可能であるか、或いは幻想である。

他面から見れば、社会活動は、自己発達——自己自身・自己の力・自己の知識・自己の信念・この信念を守り抜く自己の手腕と自己の決意の絶えざる検証——があってはじめて、人間的な意義を有する。活動の中で力は鍛えられ成長する。生活の経験とその諸課題は知識を増大させる。闘争の中で信念とそれを守り抜く力は強くなる。自己が社会的事業に参加しているという意識が既に、発達を誘発し強化する基盤である。個人が社会生活との相互作用の中でのみ正常に発達し得る如く、有益な社会活動は、それに参加する諸個人の自己発達があって始めて生じ得る。

正にこのことは、社会生活に参加する場合に、個人の踏み越し得ない一線を劃するものであって、この限界を越えると個人はその価値を失わざるを得ない。社会的関心を活気づけ、その水準を高める可能性がまだある所、生活機構の中に人間性を持ち込み、思考を眼覚めさせ、信念を強固にし、低俗な悪に対する憎悪の情を刺戟する可能性がまだある所、かかる所では、個人は社会的進歩の活動家達の陣列に加わり得るし、又加わる義務を負っている。然し、俗悪なるものが、一個人の力では引き裂き得ない織物を自己の周囲に織りなしたことを、若し個人が自覚したならば、若し個人が、事業のために他の人々の協力を必要としているのに、それらの人々が彼の要求を少しも問題にしないで、社会に巢食う寄

食者として生活しているならば、若し、紙の濫費・形式主義・追従が、国家の利益に関する官吏達の考えをことごとく押し殺してしまったならば、若し軍人が、教練や閱兵式の際に、正確な歩度や真直な隊列のみに気を取られて、自己が人間であり市民であることを全く忘れ去ったならば、若し社会的集会在、個人的敵意・個人的つながり・蟻特有の関心以外の一切に対して耳を藉さないならば、若し悪が社会にはびこり、臆病と卑劣が悪の前で眼をふさぎ、卑屈にもこれに拍手を送るならば、——かかる時には、理性的で意識的ではあるが無力な活動家に残された道は、この底なしの泥沼から——出来れば——身を避けることである。彼は、力が足りないために、社会的悪をほんの僅かも押し止め得ない。然し、少くとも彼は、悪の継続と強化にその力を用いないであろう。彼は、社会的な妄昧魯鈍の中であって、私が前の書簡で述べた進歩の伝統の目立たぬ維持者達に加わるであろう。社会的生活への彼の参加が可能になる時が恐らく来るであろう。若しその時が来ないとしても、彼は真理と正義の伝統——彼の意識の中にだけ存在し、彼が実際に具現化し得なかったし、又具現化する能力がなかったもの——を次の世代に手渡すであろう。この場合、彼が悪全般に跪かず、その手段とならなかつたこと自体が、或る種の功績をなしている。よりすぐれた理解・より大きな精力・より大きな力量を有する他の者は、恐らく、ここでも積極的な活動家たり得、闘争し得るであろう。そして、たとえ敗れたにしても、他の人々に闘争の手本を遺すであろう。皆が皆同等の力を有しているのではない。所与の時代に所与の諸条件の下で発達しながら、社会悪から遠ざかり、それに批判的態度を取り、自己の個人生活面でそれを斥け得る人々も、時々例外として存在している。

然し、行動の可能性が現われるや否や、社会に闘争と生活の諸要素が存在するや否や、発達した人間はこの闘争から遠ざかる権利を有しない。泥々の水溜りの中で、道を見付け出すのがどれ程厭わしくとも、矢張りそれを見付け出さねばならない。百人中一人か二人の生活に眼覚め得る者を見出すために、多数の半人間とも云うべき人々の中を探し廻ることがどれ程厄介なことであっても、矢張り探して歩かねばならない。うまくゆかないことが多いであろうと云うことは、あらかじめ分っている。新たな思想に到達し得るように思われる人々ですら、多くの場合、卑劣或いはつまらぬ衝動に屈して、脂ぎった施物に飛び付いたり、或いは空疎な約束に釣られて事業を犠牲にしたりするであろう。多数の者が脱落するであろう。多数の者が四散し去るであろう。更に多数の者が、個人的不和から、時には戦の真最中に、旗印を捨て去るであろう。進歩的諸理念とそれらのための仮借なき闘争の宣伝家達が、これらの諸理念を実際に、そのきびしい現実的状况において見て、それらが紙の上ではあれ程美しく穏やかでしかも邪気のないものであったということ自体に仰天し、自己の過去を否認し、かつての自己の同志と追従者達を否認し、冷かし半分の孤立した不平家・生氣のない臆病な詰らぬ人間に成り下るであろう。個人的欲得のために、自己の過去を裏切る厚顔無恥のやからも現われるであろう。闘争に打ちかつ可能性そのものが変り、進歩の擁護者の陣営が最高度に結束を固め且つ不敗であると思われる時に、突然、これが幻影に過ぎないことが分り、僅か二三の前衛的な活動家が弾圧を蒙むると、唯それだけのことで、まがい物の進歩の騎士達が片隅に姿を隠し、旗印を裏切ったり否認したりすることが、分る場合もある。勿論、このようなことは、どれもこれも不愉快極まることである。然し、若し進歩の戦士達が勝ってばかりいなければならぬとすれば、彼等の事業

は余りにも易し過ぎるというものであろう。ともかくも、闘争に勝つためには、歴史的過程によって現在各人に与えられている環境の中で行動しなければならない。正にこの環境で、しかも眼前に切迫している戦闘の性質そのものにとって出来るだけ有利な武器で武装しなければならない。戦線を離脱する権利があるのは、自己の無力を意識している者だけである。自己には力があると感じ又は考えている者は、活動舞台を拡大する何等かの可能性のある時に、些細な個人的活動舞台にその力を費やす道徳的権利を有しない。発達した人間は、この発達のために人類が費やした夥だしい代償を、自己の発達の増大に応じて益々多く返済しなければならない。それ故に彼は、彼の力の及び得るだけ広汎な社会的活動舞台を選択する道徳的義務を負っている。

このことから、次の如き問題を明らかにする必要が生ずる、——複雑な社会機構の中でいかなる諸要素が行為の基盤をなし、いかなる諸要素が活動の手段をなしているのか？ 多少とも輝やかしいが、それ自体としては死んでいる形態はどこにあり、又生きた力はどこにあるのか？

欲求は、有機界の諸過程——植物の生長・動物の繁殖——を条件づけている。それは、生理学・人間心理学及び社会学の最も重要な諸問題中の一つである。又それは、あらゆる歴史現象を説明するための不可避の出発点でもある。意志作用のある所ではどこでも、行為の根底に欲求が存在している。それ故に、歴史的諸現象のあらゆる要素は、諸個人の多種多様な欲求に帰せられる。欲求は万人に共通の事実であるが、各人の生理的・心理的特質の多様性が、これらの欲求によって呼び起される志向の多様性を生ぜしめる。ここで、既に二種類の欲求の区別を指摘し得る。

二者の中あらゆる生物に共通な諸欲求は、無意識的或いは殆んど無意識的な反射的行為・初歩的な環境適応技術を生ぜしめ、動物界に於る多種多様な本能を発達させ、一方人間社会に於ては、我々が習慣と呼ぶ一切の行為、人間生活において慣習に属する一切の行為を生ぜしめる。これは人間が、何故このようにして外の方法でしないのかということ全く考えないか、或いは殆ど考えずに、機械的に行なう行為で、これに対しては唯次の如く説明し得るに過ぎない、——「私は、こうすることに慣れてしまったのだ」とか、「これはこのようにするのだ、これは何時もこのようにされてきたのだ、これはこうすることになっているのだ」等々。私が既に述べた所であるが、この種の生理的・習慣的欲求は、動物界全部門の通性であって、他の背椎動物或いは無背椎動物から何人間を区別するものではなく、最下等の類に於てさえも——つまり、蟻・蜂及びこれらに近い生物の社会に於て——そのあらわれの極めて驚くべき実例を見せている。これらの欲求は、社会生活に於る最も強固な、若し次の如き表現が可能ならば、最も自然主義的な要素である。それらは、人類史の根底に横わる不変の経済的・統計的諸法則、及び国家とその文明の形而下的諸条件の相互確定を付与している。それらは、最初の技術を、従って——最初の知識をも生ぜしめる。それらの影響によって、他の諸動物と同じように、人々の最初の親近化が発生する。ここに源を発する社会生活は、既に文化的生活であり、欲求なしには到底考えられない人間は、正にこのことによって、何等かの文明なしには到底考えられない。人間は、昆虫と背椎動物の若干の自己の仲間達と等しく、文化的動物の一つである。

最初の個性化された諸志向と共に、一層複雑多様で一層共通性の少ない第二種の欲求群

が、有機界にあらわれてくる。この第二種の欲求群は、脊椎動物の高度の諸部門（鳥類と哺乳類）にのみ幾らか明確な形で存在し、しかもそれらの生物中の若干の科・属・種にのみ完全に形成され、自由意志によると思われる選択の中に、愛着と嫌悪のさまざまな情緒の中に現われる。これらの情緒は、全く同じような状況の下で完全な無関心から抑え難い情熱に——個体をして自己保存を忘れさせ、その他すべての欲求を抑えて、時には全く狂気じみた行為、又時には精妙な計算に基いた行為を生ぜしめ、人間にあってはヒロイズム又は犯罪の形であらわれる情熱に——移る諸志向の variability という点から考えて、一般的な欲求に帰着させる訳にゆかない。この第二種の情緒的欲求は、諸個人の私的伝記に於て大きな役割を演じているが、全体としての人類の歴史に於ては、ごく僅かな役割しか演じていない。何故ならば、人間の永からぬ生命は、彼等が非常に有力な地位に置かれた場合でさえも、自己の諸情緒の歴然たる痕跡を社会生活の中に残すのを妨げるからである。これは、情緒が、その本質そのものから云って、あらゆる個人に於て variability のものであり、しかも多くの場合、共存する諸個人の多様な諸情緒の中でそれらの力が平衡を取りあっているのが尚更である。

生理的・習慣的諸欲求は、あらゆる文化を、蜂房又は蟻塚の如き永久に反覆される諸形態に導くであろう。情緒的諸欲求は、個人的ドラマを生ぜしめるであろうが、歴史を創造し得ないであろう。歴史は、思考活動の影響によって、はじめて発生する。歴史は、今一つの新たな種類の諸欲求によって条件づけられる。それは人間だけに見られ、しかもこの人間の中でも、あまたの世代の苦悩が例外的発達を可能にした諸個人の小さな集団の中にだけ存在する。それは進歩的な、歴史的な諸欲求、発達の諸欲求である。

実に最初の技術と最初の利益の考慮が、思考の活動を表わしており、社会の文化はその思考の発達に応じて多様化してゆく。思考活動の影響によって、欲求は増大し欲求は変化する。考慮が、本能的欲望を排除する多数の合目的行為を生ぜしめる。欲望そのものは、情緒と情熱の形で、情緒の最良の満足のために熟考された行為の源泉となる。最後に、思考の批判が、本能的欲望の満足ではなくて、欲望そのものに向けられる部分が現われる。このような場合、思考は幾つもの欲望を比較し、思考の批判によって決定された価値に応じてそれらを分類する。他方では、思考そのものが愛すべき目的となって情緒を刺戟する。思考の所産に向けられたこの情緒の満足は、新たな純粋に人間的な最高の欲求となる。心を魅する目的・探求すべき真理・望ましい道徳的善としての思考を涵養すること自体が、発達した個人にとっての欲求に変わる。目的としての発達一般を考慮に置いた絶え間ない批判活動によって、あらゆる欲求と欲望は、良い欲望と悪い欲望・高い欲求と低い欲求に区分され、さまざまな位置に配置される。利益とは無関係に、真理と正義の面に於る欲求が現われる、つまり科学と芸術の基盤が創造される。生活の諸理想を打ち立てて、道徳的生活によってそれらを具現化しようとする欲求が現われる。人間は、自己の欲望・自己の欲求に抵抗し、理念・観念・生活目的に、時には幻想に——それらすべてを犠牲にし、しばしばそれらに対する批判を考へることすらなしに——完全に身を任せ得ようになる。文化に立脚した思考活動が、科学・芸術・道徳の諸要求によって社会生活を条件づけた時始めて、文化は文明に移行し、人間の歴史は始まった。

或る世代の思考活動の諸結果は、それに続く世代にとって、単に思考だけの領域に残る

のではない。それらは、生活習慣・社会慣習に変わる。このような形でそれらを伝承した人々は、それらの発生に関心を持っていない。いかに深遠な思想でも、習慣的又は慣習的にくり返されるものは、人類にとっては、海狸と蜜蜂にとっての海狸と蜜蜂の習慣的行為以上に高い現象ではない。最初の斧、粘土から始めて造った素焼の壺の発明は、初歩的な技術的思考の巨大な成果であった。然し、現代の人類は、鳥が巣を作るように殆ど無意識に斧や壺を使用している。最初の新教徒達は、カトリック寺院の絢爛豪華を避け、自分達の伝道者の周囲に集りながら、明らかに意識された思考の影響下に行動した。一方現代の彼等の子孫達は大部分、日曜のお説教を聴きに、カトリック寺院ではなくて新教の寺院に行くが、それは唯彼等の父祖達が同じ教会に通い、同じ説教を聞いたからに過ぎない。それは丁度、コウノトリが渡りの旅から戻って、去年と同じ屋根にみこしを据えるのと同様である。人間の高度の思考領域に於てさえも、同じ現象がくり返されている。即ち、現代の教師と現代の生徒は、均衡と挺子の原理に関するアルキメデスの思考・万有引力に関するニュートンの思考・化学比例の法則に関するプールの思考・需要と供給の法則に関するアダム・スミスの思考をくり返している。然し、このようなことが行われているのは、生きた自主的な智的欲求が、所与の瞬間に人間を必然的に所与の問題へ導き、且つ、この問題に対しては他の答ではなくて正にこのような答を必然的に生ぜしめるからであるというよりは、寧ろ、このように学んできた、このように学んでいる、このように学ぶべきだという教育上の慣習による方が、遙かに多いのである。海狸ですら同様の教育的・技術的慣習によって、樹木を伐り倒し、樹皮をはぎ、それらを浮送して自分達の住居を建設しているのだということを、考えて見る必要がある。一般に、習慣と慣習の形に於る父祖達の文明の一部は、子孫達の生活に於ては、動物的な文化的要素に外ならない。新たな世代の思考は、この第二次形成の習慣的文化に対して批判的態度で臨み、社会が停滞に陥いるのを防ぎ、且つ、伝承的習慣と慣習の中から、真理・美・正義の道程で将来の思考活動の可能性あるものを見分け、残りの全てを存在意義を喪失したものとして捨て去り、思考活動によって生気づけられる新たな文化機構として新たな文明を作り出すようにしなければならない。

人類の各世代に於ても、同様のことがくり返されている。各世代は、文化的習慣と慣習によって著しく制約される欲求と欲望の総体を、自然及び歴史から受けとる。各世代は、生活のしきたりと継承した社会制度・手工業・旧守的技術によって、これらの欲求と欲望を充足する。これらすべてが、その世代の文化、つまり人類の生活に於る動物的要素を成している。然し、あらゆる文明の継承した習慣の中には、批判の習慣が含まれており、正にこの批判の習慣が、歴史の人間の要素・発達の欲求とこの欲求を考慮に入れた思考活動を生ぜしめる。科学の批判は、世界観の中に一層多くの真理をもたらす。道徳の批判は、科学と正義の応用を生活の中に拡大する。芸術の批判は、真理と正義を一層完全に体得せしめ、生活を一層調和あるものにし、文化を一層人間的に優美なものにする。文化的原理が社会で優越し、思考活動が抑圧されるだけ、それだけ社会は、その文化がどれ程輝やかしくとも、蟻や黄蜂の体制に接近してゆく。その相違点は、唯欲求と欲望の程度と形式の違いに過ぎない。社会に於て、思考活動、すなわちその文化に対する批判的態度が強力であるだけ、それだけ社会は、一層人間的であり、下等な動物界から一層遠ざかる、たとえ

書簡 其の七

個人と社会的諸形態

個人が、自己の現実的諸問題の中で最も重要なものを解決した、つまり、彼が自分の力を量り、自分の事業を決定したと仮定しよう。

彼の前には、種々の社会的諸形態が存在している。これらの諸形態が、その本質並びに広さの点で、真理と正義に関するある人の諸信念と一致している場合があり得る。そのような時には、彼は幸福である、——彼は、これら諸形態の中で、それらと争わず、それらに拘束されずに、行動し得る。彼は幸福である。然し、彼にはこの場合、自分を進歩の活動家と見なすべきものは存在していない。批判的に思索する個人としての彼は、その有益さの点で、批判的に思索しない他の諸個人と異なる所がない。逆らい得ない進歩の波が、彼等を悉くさらってゆくであろう。唯彼は、どうなるかを外の者より良く識っているだけである。

然し、これはシャハラザードの物語なのだ！一体、何時、どこで、すべての社会的諸形態が、かなり控え目にさえ科学性と正当性の諸要求を充たしたであろうか？ 若し個人が、自己の周囲到る所に善、到る所に福祉、到る所に道理を見たとすれば、彼は自分が多くのものを批判的に熟考せず、不注意 或いは 生来の道徳的近視の故に多くのものを見落した、と確信して間違いない。十分批判的に思索する個人となるためには、彼には決意が足りないか、でなければ力が足りないのである。

批判的に思索する者が熱烈に求めるものは、存在する善を楽しげに観察することではなくて、この善の終る限界——即ち、進歩に対する敵対的力又は俗悪、旧慣墨守としての悪が始まる境界である。自己の中に人格を涵養しなかったすべての者は、立派な人々をその立派さに応じて十分嘆賞するがよい、浮世のさまざまな居心地よい片隅をその心地よさに応じて十分楽しむがよい、さまざまな楽しい生活の集いをそこで味えるだけ楽しむがよい。人格を持たないこれらの人々にとっては、それが当然なのだ。彼等には自主的な斗争は不可能なだけだから。

然し、批判的に思索する者は、立派な人間がどこで立派な人間でなくなるかを探し出し、且つ、彼の欠点と長所を総合して彼を評価するために、彼の思想と行為を深く探索する。第一の者に対しては、大胆に彼の弱点を指摘し、且つ、彼自身がこれに気付き、理解してこの弱点を矯正せんことを期待し得る。第二の者——発達しているが疲労困憊した者——を勇気づけ、今後の速やかな発達のために新たなエネルギーを彼に与えることが出来る。正しい道からそれてゆく第三の者を、再び元の活動に向かわせることが出来る。第四の者に対しては、彼が、彼の力の一部を奪うものを払いのけ得ないながらも、残りの全ての力を進歩に対する協力に向けている時、彼の事業に免じて彼を赦すこともできる。第五の者からは、断乎としてその仮面を剥ぎとり、彼の俗悪さや反動性を暴露し得る。然し、これらすべてのことを為すには研究が必要である、——人間の中にひそむ他ならぬ悪を研究し、人間の能力と相並んでその弱点を研究し、その輝やかな長所よりもその俗悪な面を一層多く研究する必要がある。

正にこのように、批判的思索は、居心地よい片隅や人生の静かな隠れ家で殆ど休息するいとまもないのである。従順な妻と愛らしい子供達・保証された生活と立派な地位・非の打ち所ない報告とやましからぬ良心・巨大な学殖と学者としての名声・争う余地なき芸術的才能とその作品に対する多額な報酬——これらはすべて素晴らしい、これらはすべて幸福である。然し、これらはすべて文化的な人間生活のメカニズムに過ぎない、この表面きらびやかで絶えずあくせくした生活の中では、人間が、一生を過し得るのは人間としてではなく、考える蟻としてである。子供を沢山こしらえる父母・自己の収入を湯水の如く費消する資本家・仕事を命ずる官吏・学位論文を書く学者・時代の美的趣味を満足させる芸術家達が、年々歳々世代毎に繰り返すことを、ひたすら促進しているだけである。

人間の蟻塚が人間の社会に変ずるのは、苛責なき精神的欲求を伴った批判が、居心地よい片隅の平和な幸福又は眠り込んだ旧慣墨守を破壊し始める時だけである。眞実なる夫婦よ、果して君達は、誠実に・人間的に・自覚的に互に愛し合っているか？ 君達は本当に子供達を正しく発達させているか、只沢山彼等を生んでいるだけではないのか？ 幸運な投機家よ、本当にお前は自己の財産と地位を働いて手に入れたのか？ 正直な官吏よ、お前は本当に社会のために働いたのか？ 多くの著書を発表した学者よ、お前は本当に科学を前進させたか？ 芸術家よお前は完璧な詩的作品を本当に創造したのか？ これらすべての生活形態——それらによって諸君が美々しく身を飾り、神聖なものとして身に纏っている所の生活形態・諸君が生活のより所とし、且つ諸君の全生涯がそれらの完成に費やされる所の生活諸形態、——諸君がこのようなものに仕立て上げた現在の生活形態は、本当に合理的な人間的内容を包蔵しているのか？ それらは、真理と正義の名に於て別なものであっては本当にならないのか？ それらを蘇がえらせるために、それらに対して戦かっては本当にいけないのか？ 本当にそれらは偶像ではないのか、諸君はそれらの偶像を楯にして、自己の旧慣墨守・思索に対する自己の恐怖・狭義に於る自己のエゴイズムに跪拝しているのではないか？ その代りに真に神聖なものを据えるために、これらの偶像をその台座から引きずり下しては本当にいけないのか？

然し、思うに、ここで四方八方から反駁の声が湧き上るであろう。何個人だって！ 単独の取るにも足りぬ無力な個人が、民族の歴史・人類の歴史によって作り出された社会的諸形態に批判的態度で臨もうと考えるんだって！ すべての他の社会成員が神聖視しているものを、個人が偶像としてくつがえす権利があり、且つ、くつがえす力があるものと自己を見なすんだって！ それは犯罪的だ、個人は多数の前では権利を持っていないのだから。それは有害だ、社会的諸形態に満足している多数の幸福は、それらを悪として否定する個人の苦惱より重要だから。それは不合理だ、所与の社会的諸形態を作り出した多くの世代は、総体としてはあらゆる諸個人より聡明だから。それは無分別だ、社会とその歴史の前では個人は無力だから、——これら四つの反駁を順を追って考究してみよう。

先ず第一に、権利について。進歩は存在していないか、でなければ嘘偽と不正の意識を社会的諸形態へ具現化したものである。私は、現存のものと異った形で真理と正義を認識し、現状に於る嘘偽と不正を指摘し、この認識された嘘偽と不正に対して闘争しようとして欲している。これに対する私の権利を否定する権利がどこにあるのか？ 現在の諸個人にあるのか？ 然し、彼等が私に、私の誤っていることを証明するのはよい。私と論争するのはよ

し得るとしても、次のことがらを銘記すべきだ、——歴史は現代の世代で終りを告げるのではないということ、他の諸世代がこれに続き、或る行為によってもたらされる害悪の絶対量は、この行為のために未来全体に追加される悪の増大量全体によって計量されるということがこれである、若し私がより多くの真理と正義を社会的諸形態に具現化することの実際的促進に成功するならば、生活の中にもたらされた善の一部を享受するであろう一連の後続世代にとって、悪の量は減少するであろう。若し私がこれを拒否するならば、彼等の苦悩は増大するであろう、然し、現在の社会——或いは、より正確に云えば、現在の社会機構の諸便宜を享受している小数者の間——では、苦悩は幾分減ずるであろう。だが実際にはそれすら疑わしい、何故ならば、社会に真理と正義が少なければ、それだけその社会では或る人々の苦悩は多く、他の人々の価値は低下するから、かくして、一面からすれば、多少とも長期にわたる一連の世代にとって明白な害悪であり、他面からすれば、現存の世代にとって疑わしい利益である。どちらの側に組すべきかなどという問題であり得るだろうか？ 一体全体何が不愉快なのか？ 若干の人々が、彼等にとって昨日真実であった形態が実は真実ではないということ・発達した人間はそれを享受すべきではないということを理解すると仮定しよう。誤謬を自覚する不愉快さは、果して悪であろうか？ 人間的な社会に転ずるための途上で、社会的蟻塚が一步前進するものと仮定しよう。人間が人間らしくなることが、果して悪であろうか？ かくして、真理と正義のための戦から生ずる利益は、若し本当の真理と正義が問題でありさえするならば、又若し成功が可能であるならば、ともかくも疑う余地はない。私が闘争の害悪を認めるのは、——従って私が闘争の権利を自分から取り上げるのは——真理と正義の自己の理解に疑問を抱くか、或いは、私の信念を具現化する自己の無力を確信する場合だけである。——個人は第二点で勝利を得た。第三点を取りあげよう。社会的諸形態に対する個人の闘争が、どれ程不合理なものとして認められ得るかを考察しよう。

自己の知識と自己の智力を批判的に考察する個人が、所与の部門に於る自己の知識を補足し、自己の思考をこれに向け、一定の信念に到達した。所が、この信念が、歴史的に作り出された形態に一致しないことがはっきりする。すると彼に向って人々は云うであろう、——服従せよ、何故なら、民族精神・人類の経験・歴史の理性は、お前に反対なのだからと。これらの論拠に基いて、自己の信念を不合理なものとして放棄する十分な理由が個人にあるであろうか？

民族精神とは何か？ 物質的諸特質は、或る環境の影響下で生活する一連の世代に、民族性の不可避的な自然的基盤を付与する。この一連の世代の中歴史的に生活した僅かな小数者が、彼等の文化を——程度と形を異にして種々の民族階層に拡がり・さまざまな形で民族的習慣・民族的慣習になった文化を創造した。この小数者に働きかけ、且つ彼等を通して多数者にも働きかけ得る諸個人が、時々現れた。これらの諸個人は、以前の文化的諸形態の中に新しい思想をもたらし、あるいは他の文化の名に於て若干の文化的諸形態を改革し、又時には、新たな思想に基づいてこれらの改革を行った。民族は、自己の歴史のいかなる時期に於ても、これら三つの要素——自然的=必然的要素・歴史的=習慣的要素・個人的=思索的要素——の結果を、自己の生活の中に提示する。これら三つの組合せが、民族精神を構成してきたし、現に構成している。この民族精神の中で不可避的なもの

は、物理的・風土的に条件づけられるものだけである。其の他のすべては、諸個人の思考と行為の影響によって絶えず変化する所の習慣である。諸個人が殆ど思索せず、殆ど行動しないならば、多数の世代にわたって習慣は変化しない。その文化は自己の諸特質を温存し、その文明は益々停滞に陥り、民族精神は益々固定し、全く動物の習性でも記述するように記述し得る諸形態をとる。だが、諸個人が活動的であり、彼等の思考が少数者の狭い枠に止まらずに多数者の中にまで拡がろうとするならば、習慣は殆ど安定するいとまがない。文化は少数者の中で急速に変化して、幾らか緩慢に多数者へ拡がってゆき、文明は硬化するよりは寧ろ、脆弱なものとなる危険を冒す。このような場合、民族精神を決定することは頗る困難であり、これを論ずる著述家の大部分は互に意見を異にする。勿論、社会には、共通の自然的＝必然的基盤の上に、歴史的な習慣的文化の若干の層が、少数者に於るより急速な文化の変化と多数者に於るより緩慢な拡大の結果として、存在している。著述家は、自己の発達程度に応じて、彼に最も気に入ったいずれかの層に民族精神を帰着させ、いずれかの典型的時代の中に真の民族の歴史を見出す。真の民族精神を表現する典型的フランスはどこにあるのか？とフランス人に尋ねて見給え。すべての正統王制・選挙王制・篡奪王制の没落の後に、恥ずべき帝制の没落の後に、表立った庇護者の裏切りによって血潮の中に息絶えたり、売られたりした共和国の幾多の試みの後に、諸君は今、文学の中・社会の中・現在の専政的な議会の中に、あらゆる党派の代表者達を——彼等がその伝統を支持している時代の歴史においてこそ、民族精神をもった真のフランスは、具現化されたのだということ、証明するであろう所のあらゆる党派の代表者達を見出されるであろう。或る者は、熱烈なカトリシズム・ラシーヌ・ブァローを擁するアンシャン・レジームとルイ十四世を指すであろう。次の者は、《人間の諸権利》を掲げた一七八九年を、第三の者は、ロベスピエール或いはバブーフを、第四の者は、小さな伍長を、第五の者は、ルイ・フィリップ治世下の騒然たる議会主義の時期を指し、第六の者は、第二帝制下の《平安・富・栄光》の時代を顔も赤らめずに挙げ、又、ルイ聖王や異端審問の時代に遡るような人々もあるであろう。しかも皆が皆、これがフランスの真の民族精神の時代である、という論証を挙げるであろう。ロシアの真の民族精神はどこにあるのか？と我々の同胞に尋ねて見給え。或る者は、ストグラフと《ドモストロイ》を有するイヴン・ワシーリェヴィチ雷帝のモスクワを指すであろう。或る者はノヴゴロドの民会の鐘を、或る者は《美しいお日様》ヴラジーミル公・史謡のスヴァトゴールを指すであろう。又、偉大なるピョートル大帝を、偉大なるエカチェリーナを、諸改革を行ったスペランスキーを数えあげる者もあろう。或る者は 1854 年を、或る者は 1861 年を、或る者は 1863 年を、又或る者は 1889 年さえを選ぶであろう。そしてこれらの人々すべてが論争し、すべての人々が、真のロシア民族精神は、ここにおいてこそ把握され、推察され、具現化されて、神話に、習俗に、法令や言葉になっているということ、証明するであろう。彼等の中で誰が正しいのか？ロシア民族精神の発達はどこで停止したのか？有史前のスラヴ的習俗に於るか？ビザンチン文化の層に於るか？それとも、ピョートルの文明とその官僚制度の層に於るか？それとも又、この精神は、あくまでも自己を保持しながら、益々新しい諸要素を受け入れる能力を有しており、且つ将来も受け入れるのであろうか？——このように考えない人々がいるとしても、人間の見解は多種多様なものだから、他人がこのように考

え且つこの信念に応じて行動するのは、許してやり給え。又、民族精神は、牡牛やりょうくの如き動物諸種族よりも、より広汎な新しい諸要素を摂取消化する或る能力を、持っていることを許してやり給え。民族精神に関する概念、より正確に云えば、所与の民族にとっての最大の真理と正義に関する概念は、無限に多種多様なことから、批判的に思索する個人が、真理と正義に関する自己の見解を、それはそれ以前に民族精神の一部となった多数の力と同じ位、その中の一要素になり得るのだと期待しながら、吐露し実行するのを許してやり給え。何故、「ドモストロイ」の著者は、民族精神を表現する権利を私より多く持っているのか？何故、或る措置は新しい生きた要素を民族精神にもたらすことが出来、他の措置はそれが出来ないのか？

これに裁定を下し得るのは、歴史の批判・民族精神の批判・真理の批判・正義の批判のみである。しかもこの批判は、個人に於てのみ実現され、且つ実現され得る。正に民族精神——しかし、動物的に固定したものではなくて、人間的に発達してゆく民族精神——の名に於て、個人は、民族精神を批判し、文化的諸要素が現在変更され得ないものである限り、民族精神の中で自然的＝必然的なものと、より正しい真理・より広い正義の観点から見て、文化的諸要素の中で改造しなければならないものを究明しなければならない。所与の時代に於る民族精神とは、この時代の批判的に思索する諸個人——民族の歴史を理解し、且つ、その現在の中に出来るだけ多くの真理と正義をもたらしと希求する諸個人——の精神である。全く同様に、人類の経験も、批判的に思索し精神的に希求する同様な諸個人による人類史の理解に外ならない。——歴史の理性に関していえば、若しこの理性が公式の枠外の何かであるとしても、それはたかだか言葉であり、空想家にとっての幻・臆病者にとっての妖怪を出ない。多数者は常に必然性に服従し、少数者は常に享楽を求めてきた。僅かな諸個人だけが、真理と正義を理解し実現しようと欲してきた。明瞭に過去を理解し、精神的に真実を希求する個人は、その本性からして、人類の真の経験の正当な評価者であり、歴史の真の理性の正当な解釈者である。

かくして、若し人間が、過去の明瞭な理解と真実に対する精神的な希求とを自覚したならば、社会の歴史的諸形態の故に、自らの涵養した信念を、彼は拒否し得ないし、拒否してはならない。何故ならば、理性・利益・権利は彼の味方であるから、彼がなさねばならぬことは、切迫した闘争に備えて自己の力を量り、現に彼の持つ力を無益に浪費せず、それらの力を出来るだけ増強し、可能なもの・達成し得るものを評価し、自己の行動計画を熟慮し、そこで決心をつけることだけである。かくして、最後の一点だけが残っている。

習慣・慣習・法律・社会の仕組・物質的力・道徳的後光によって守られた社会的諸形態に対する個人の闘争は、無分別である、という話であった。一般大衆中の多くの者が、単独で戦う個人と同じ位それぞれ強力である場合に、しっかり結束した彼等大衆に対して一体個人は何をなし得るのか？

然し、一体歴史はどのように進行してきたのか？誰がそれを前進させてきたのか？——単独の闘争する諸個人である。ではいかにして彼等はこれを成し遂げてきたのか？そのためには、彼等は一つの力となったし、又ならねばならなかった。従って、第四点は、一層複雑な答を要求する。社会的諸形態の前では、個人は事実無力である、然し、それらに対する個人の闘争が無分別であるのは、彼が力になり得ない時だけである。然し、歴史は、

これが可能であること、これこそが歴史に於て進歩を実現する唯一の手段であることを証明している。かくして、我々は——か弱い諸個人がいかにして社会的力になったのか?——という問題を提起し、解決しなければならない。

書簡 其の八

成長してゆく社会力

「戦場の一人は、戦士でない」という古い諺があるが、社会的諸形態の批判とそれらの中に正義を具現化せんとする願望とを抱いて、社会の前に立ち現われる個人は、無力な一個の人間として、勿論とるにも足らぬ存在である。それにも拘らず、このような諸個人が、社会的力・社会の推進者となって、歴史を創造した。一体彼等は、いかにしてこれを成し遂げたのか?

先ず第一に認識しなければならないことは、或る活動家が実際に批判的に思索する個人であるならば、彼は決して孤独ではないという事実である。彼の社会的諸形態の批判は何にあるのか? それは、現在の社会的諸形態に於る諸欠陥と正義の欠除を、彼が他の人々より一層明瞭深刻に理解したということにある。然し、これがその通りであるとしても、非常に多くの人々が、これら諸形態の重圧の下で、苦しみ・歎き・もがき・破滅している。唯彼等は、批判的思索が十分でないために、何故自分達が苦しいのかを理解していない。然し、彼等に説明してやれば、彼等は理解することができ、しかも、理解する人々は、最初にその思想を語った人と同じ位良く理解し、若しかすると一層良く理解するであろう。何故ならば、恐らく彼等は、この思想の正しさをその最初の宣布者より遙かに完全に遙かに多面的に、苦しみ抜いた上で了解するであろうから。かくして、社会的諸形態に対して闘争を開始した個人は、自己を完全に孤立させないために、ひたすら自己の思想を述べて他の人々に理解させなければならない。若しこの思想が正しければ、彼は孤立しないであろう。彼は、最も新鮮な感受性豊かな思想を有する人々の間に、意見を同じくする同志達を持つであろう。彼等は彼に知られておらず、ばらばらに分散しており、お互いに相手を知らず、彼等を押し潰す悪の前で自己の孤立と無力を感じている。彼等を押し潰す悪を彼等に説き明かす言葉が彼等に達した時、彼等は恐らく一層不幸になった。然し、彼等は到る所に存在している。思想が正しく真実であればある程、彼等の数は益々多い。これは目に見えない感知されない力・まだ行動にあらわれていない力である、然し、既に一つの力である。

力の行動があらわれるためには、手本が必要である。個人が、自己を孤立したものとして感じないためには、彼は、どのように彼が苦しいか・何故これ程に苦しいかを理解しているのみならず、この悪に抵抗して行動する他の個人の存在していることを、知らなければならない。必要なのは、言葉だけではない、実行も必要だ。全てを賭け・全てを犠牲にする覚悟を有する精力的・熱狂的な人々が必要である。殉教者達が必要だ、彼等の伝説は、彼等の真の価値・彼等の実際的な功績を遙かにしのぐであろう。人々は、彼等になかった活動力を、彼等が有していたかのように考えるであろう。人々は、彼等の後継者達が完成したより良き思想・より良き感情を、彼等の口から発したものとするであろう。彼等は、一

般大衆にとって全く及びもつかぬ理想となるであろう。然し、その代り、彼等の伝説は、闘争に必要なエネルギーによって多くの人々を鼓舞するであろう。決して語られなかった言葉が繰り返されて、始めの中は意味がよく分らないが、次いで次第に良く理解されるようになるであろう。理想的な歴史上の人物を決して鼓舞しなかった思想が、ずっと後の世代の事業に、あたかもその示唆を受けたかのように、具現化されるであろう。破滅してゆく人間の数は、ここでは重要でない。伝説は、絶えず可能な局限まで彼等の数を増大するであろう。歴史が証明している如く、社会的諸形態を擁護する保守主義達は、賞讃すべき献身の情を以て、常に極めて多くの破滅した闘士達を一般大衆に跪拝させてきた、——何らかの社会的形態に対する反抗は、その英雄達の長い殉教者列伝の作成に役立つということを見せつけるために——闘争のこの段階では、批判的に思索する諸個人は自分達の前に既に現実的な力を有しているが、ただそれは整然たる力ではない。この力は、最初に目につく詰らぬ些事のために、大部分無益に費やされる。人々は悪の具体的なあらわれによって破滅し、しかも悪の本質は依然として少しも変らない。苦悩は減少せず、恐らく増大させるであろう、何故ならば、闘争が激化するにつれて敵の怒は烈しくなるから。闘士達自身の間に反目・分裂が始まる、何故ならば、彼等が苛烈に闘争すればする程、益々烈しく互に監視し合うであろうから、活動家達が全精力をふるい、あらゆる犠牲を払っても、結果は取るに足らない。力はあらわれた、然し、空しく浪費される。それにも拘らず、これは既に力である。自覚的な力である。

力が空しく浪費されないためには、これを組織しなければならない。批判的に思索し、精神的に願望する諸個人は、闘争のみならず勝利をも希求しなければならない。そのためには、達せんとする目的のみならず、その達成を可能ならしめる諸手役をも理解しなければならない。若し闘争が重大なものであれば、存在意義を喪失した社会的諸形態に抵抗する闘士達の中には、自己の苦悩のために戦い且つこの苦悩をもっぱら他人の言葉・他人の思想から理解した諸個人だけがいるとは限らない。闘士達の中には批判的に事態を熟考した諸個人もいる。彼等は、互に同志を見付け出さなければならない。彼等は団結して、生れ出た歴史的力の雑然たる諸要素に整然たる秩序と一致を付与しなければならない。その時力は組織され、その行動を所与の攻撃目標に向け、且つ所与の目的のために集中し得る。今やその課題は、最小の力の消費で最大の事業を成し遂げる、という全く技術的なものとなる。無意識的な苦悩と夢想の時期は過ぎ去った。英雄的活動家・熱狂的殉教者・無分別な力の浪費・無益な犠牲の時期は過ぎ去った。落ちついた意識的活動家・慎重に計画された攻撃・厳密な思考・毅然たる忍耐強い活動の時期が到来した。

これは最も困難な段階である。最初の二つの段階は、自然に発展する。つまり、苦悩が一個人の中に思想をはぐくむ、この思想が語られ拡がってゆく、苦悩は自覚的なものとなる、ここかしこにより精神的な諸個人が出現する、殉教者達が現われる、彼等の破滅がエネルギーを増大させる、これらのエネルギーが闘争を強化する。これらすべては、一切の自然現象と同じように、一つ一つ不可避の順序を追って生起する。この現象が、大なり小なりの規模でくり返されなかったような時代は存在せず、時には、それは極めて広汎に展開された。然し、存在意義を喪失した諸形態に対して、真理と正義のために戦ったあらゆる党派の中で、勝利を収めたものは非常に少ない。其の他の諸党派は、破滅したり、分裂

したり、生気を失ったりした。それらは、新しい時代が新しいプロテストを生み、新しい諸党派を形成した時、消え去り、それらの時代は二度と帰ってこなかった。これらの党派が勝利を収め得なかったのは、ただそれらが、自然的な方法で最初の二つの段階を進んでゆく際に、第三の段階を創造し得なかったからである。何故ならば、この第三の段階は自然に実現されるものではないから。この段階は、そのあらゆる細部・原因と結果・目的と手段にわたって熟考されなければならない。多くの個人的な不愉快なことがあっても、又退屈で単調な活動——多くの場合人目につかず評価もされない活動——をしなければならなくとも、この段階を求めなければならない。断乎として求めなければならない。忍耐強く不成功を堪え忍び、一つ一つの状況を利用し、何人をも何物をも見落さず、全力をあげてこの段階を準備し・維持し・防衛しなければならない。これは、人間的に熟考され、人為的に創造される段階であり、この段階は、出来るだけ速やかに経験してしまうことが望ましい。何故ならば、この段階が継続する間ずっと、諸党派は、一切の生命あるものを脅やかす諸危険に極度にさらされるからである。これらの危険は、文明の進歩を論ずるに当って私が既に語ったもので、連繋が強固でないために崩壊する危険・一面的志向の沈滞の形で硬化する危険が即ちこれである。諸党派にとって、これらの危険は、この段階で最も強力である。それは、党派がこの段階に於てのみ有機的な生活を営み、様々な諸機関が全部一つの活動に集中されるからに他ならない。崩壊と硬化が破滅を以て脅やかすのは、有機体だけである。この段階に至るまでは、諸個人は欲望に服従していたが、欲望は、諸情況に直接由来するが故に、強固である。今や諸個人は思考に服従しなければならないが、思考は、それが明瞭である場合にだけ、強固であり、思考の明瞭性は、多面的な欲望そのものによって絶えず脅やかされる。そこでこの段階の主要な諸困難が何にあるかを検討してみよう。というのも、諸個人はこれらの困難に打ち克って初めて、真理と正義のための闘争で社会に於る現実的な組織的力になるから。

批判的に思索する諸個人——彼等は、他の人々よりも多くの能力と精力を有しているが故に正に党を組織するために結集しなければならない——はより明確な個性を持っている。彼等は自己の思索する習慣を涵養した、それ故に、他人の見地に立ってこれに従うことは、彼等にとっては、他の人々より困難である。彼等は、行動の自主性を涵養した、それ故に、自ら良しとするところと全く違ったように行動することを自分に強いることは、彼等にとっては誰にとっても困難である。彼等は、社会の旧慣墨守の中であって自己の自主性を誰よりも良く守り通すことが出来た、それ故に、彼等にとっては、単独で行動するのが最も好都合である。然しながら、自主的に思考し・自主的に行動し・精神的孤立に慣れたこれらの人々こそが、今や結果し、団結し共に考え、共に行動し、強力で統一的な或るもの——集団的力によって強力で、抽象的一致によって統一的なもの——を組織しなければならない。彼等が旧慣墨守の同化作用から守ってきた個性・彼等が全く慣れ親しみ且つ非常に大切にしてきた個性は、全体の思想方向、全体の行動プランの中で消失しなければならない。彼等は有機体を創造する。然し、彼等自身は、この有機体の中で諸機関の地位におさまる。しかも、彼等は自発的にこれを行なう。

これらすべては、頗る困難なことである。これらの精力的な諸個人の間には、分裂と反目の危険が絶えずつきまとう。然し、反目は、今や前の段階に於る場合と全く異った意義

を有している。個性的行為が優越していた前の段階、実例と個人的エネルギーによる宣伝の時期には、何のためにエネルギーを消費するかという事情はさして重要ではない。エネルギーがありさえすれば、台座に祭り上げてその名前と手本によって新しい事業に奮い立つことのできる英雄が現われるだろう。相互の無益な闘争に力を使い果たした二人の仇敵が、ヴォルテールとルソーの如く、子孫達のパンテオンの中に隣り合って並ぶことも可能である。然し、今や分裂は死を意味する、全体の事業の勝利と党の未来の否認を意味する。そこで、自主的な諸個人は、極めて貴重で深遠な彼等の信念にやがて勝利を可能ならしめんがためだけに、自己の習慣的見解の一部を譲歩し、且つ自己の習慣的行為の一部を放棄しようという確固たる意図を抱いて相集まる。彼等の一切の思考力は、再び自己の精神、自己の行為の批判に向けられる——しかもこれは、これらが本当に正しく真実であるかを認識するためではなく、これらが自己の志向、自己の信念の本質と本当に密接不可分であるかという問題を解決するためである。若し、密接不可分であれば、彼は、自己の価値を失わずには、且つ自己自身の中にある貴重なものすべてを犠牲にしないでは、この一部を放棄することは出来ない。たとえ自己の諸理念にとっての勝利の可能性が問題であるとしても、放棄することは出来ない。何故ならば、勝利を得るのは、その場合には、自己の諸理念の名称だけであって、それらの名称の陰には、本人ですらその中に自己の諸理念を見分け得ぬ程俗悪化され歪曲された何ものかが隠れているであろうから。共同の事業を目指して結集する諸個人は、どこまで譲歩が可能であるか、どこで事業への裏切が始まるかを、完全に理解して始めて、力強い精力的党派を組織し得る。若し、彼等が露ほども譲歩しないという断乎たる考えで集まるとするならば、彼等には集まる理由は何もない。彼等にとって、共同の事業は存在しない。彼等は各々、進んで他の人々を自己の思考システムの手段に——その中でこのシステムが信念と習慣に於る一切の本質的なものと偶然的なものを含んだ全一体として形成される如き手段にするであろう。然し、互に相手を精神的奴隷にしようとするこのような集りは、党派の組織ではなくて、一個人の衝動と目的のために、すべてをメカニズムに変えようとする試みである。各人は、自己の見解に於る本質的なものを、習慣的なものから区別しなければならない。各人は、本質的なもののために、習慣的なものを——それがどれ程貴重なものであろうとも——犠牲にしようという決意を抱いて、同盟に参加しなければならない。各人は、自己を全組織体の一機関と見なさなければならない。彼は、生命のない道具でもなければ、無意味なメカニズムでもない、だが矢張り、彼は単なる一つの機関である。彼は、自己の機構、自己の機能を有しているが、全体の統一に服従する。これが、条件である、組織体が生きてゆく不可避的条件である。これが、一致した行動の条件、勝利の条件である。

然し、反目が致命的であるとすれば、習慣的なものに於る譲歩が必要であるとすれば、諸個人が共同の事業に服従しなければならないとすれば、本質的なものに於る譲歩も、矢張り同様に致命的であろうし、活動家達が、他人の思考の機械となることなしに思索する個人として踏み止まることも、矢張り同様に必要である。自己の信念の中で本質的なものを譲歩した者は、真面目な信念など全く有していないのである。彼が奉仕しているのは、理解され・熟考され・希望された事業ではなくて、無意味な言葉、空虚な響である。勿論、勝利は、強固な同盟なしには、行動における統一なしには不可能である。勿論、勝利はず

すべての闘士にとって望ましい。然し、勝利それ自体は、思索する人間の目的であり得ない。勝利が何等かの内的意義を有することが必要である。重要なのは、誰が勝ったかではない、重要なのは何が勝ったかである。重要なのは、勝利する理念である。若し、理念が譲歩のためにその全内容を失ったとすれば、党は意義を喪失し、党には何らの事業も存在せず、個人的優越だけが論議の対象になる。その時には、真理と正義のための戦士達の党は、彼等が敵として戦っている社会機構の旧慣墨守主義者達と、少しも異なる所がない。彼等の旗印には、かつては真理と正義を意味したが、今は全く意味のない言葉が、掲げられている。彼等は、これらの響き高い言葉を幾度となくくり返すであろう。これらの言葉に自己の理解・自己の魂・自己の生活を託する青年達が、彼等を信頼するであろう。だが、青年達は、その指導者達やその旗印を信じなくなるであろう。裏切者達は、泥の中を昨日の聖物を曳きずってゆくであろう。反動主義者達は、これらの旗印——それらを掲げた者達自身によって汚された旗印——を嘲笑するであろう。偉大な不滅の言葉は、それらの意義を回復し、且つそれらを現実化する所の新人達を待望するであろう。勝利のためにすべてを犠牲にした古い党派は、恐らく勝利を収めないであろう、そしていずれにせよ、空虚な停滞の中で枯死するであろう。

かくして、党の組織は、勝利のために必要である。然し、党が生きた組織体であるためには、全体に対する諸機関の服従と諸機関の生命力とが同様に必要である。党派は、思索し、信念を有し、且つ精力的な同盟者達によって形成される。彼等は、何のために結集するのかを、明瞭に理解している。彼等は、自己の自主的信念を極めて大切にする。彼等は、これらの信念の勝利のために、可能なすべてを成し遂げようと固く決意した。彼等は、これらの諸条件があってはじめて、彼等を脅やかす二つの危険——分裂と停滞——を免がれることを期待し得る。

これらの諸条件が、充たされたものと仮定しよう。批判的に思索し、精力的に願望する諸個人が、結集して党を組織した。然し、このような組織の発生を可能ならしめたこれらの諸条件そのものによって明らかな如く、党の組織者達に課さるべき諸要求を完全に充たし得る人々は、批判的に思索する諸個人の間ですら極めて僅かしか存在しないであろう。然し、彼等は、第一に、同様に批判的に思索する人々の間に可能性ある同盟者達を有しており、第二に、批判的思索に到達してはいないが、社会的無秩序そのもの——それを除去するために党が組織される——のために苦しんでいる一般大衆の中に不可避的同盟者を有している。

先ず、前者について語ることにしよう。彼等は、先にも述べた如く、批判的に思索する人々、インテリゲンツィヤである。然しこの場合、強力な党の組織者となるには、彼等には何か欠けている。第一の人々は、すぐれた思考力を有しているにも拘らず、組織があってはじめて勝利が可能であることに思い至らず、先行段階の孤立した英雄的闘士達の観点に止まった。第二の人々は、そこまで考え及びはしたが、個人的自尊心・習慣的行動方式を共同の事業のために犠牲にする決心がつかなかった。第三の人々は、本質的でないものを本質的なものから十分に区別し得なかった。反対に、第四の人々は、熱烈に勝利を願望するの余り、党に完全に服従し、本質的なものを犠牲にし、機械的な道具になることを辞さない、そしてこれを為し得ない人々を批難する。尚それ以外の範疇に属するインテリ

ゲンツィヤもいるであろう。明らかに真理と正義のために戦かう党派を組織した人々は、味方が少数であるが故に、先ず第一に、彼等の周囲に散在して組織体の一部となり得るあらゆる要素によって、党の力を増強しなければならない。その際重要なのは、参加者の数よりはむしろ、彼等の価値・彼等の自主的思考・精力的意志である。彼等の中で特に重要なのは、新しい組織体の生命を更に発展させる自主的で精力的な党の中核となり得る人々である。かくして、まだ運動に合流していない最初の三つの範疇に属する人々が、特に重要なものとなる。第一の人々には、事業の実践的意義を、第三の人々には、その理論的本質を説き明さなければならない、第二の人々は、説明抜きで事業に引き入れなければならない。彼等は皆、将来極めて有益な活動家になり得る。彼等は皆、可能性ある同盟者達である。若し全体の利益を理解するならば、彼等を正にこのように見なさなければならない。既に党組織の一部となったすべての要素並びに将来その一部となり得るすべての要素に対する組織途上の党の活動は、この見地から決定される。

然し、社会的党派は、書斎の学者達の党派ではない。それは、具体的な形をもった真理と正義のために闘争する。それは、社会に存する一定の悪を考慮に置く、若しこれが本当に悪であるならば、この悪の巨大さ全体を実感してはいるが、その原因もそれに対する闘争手段も明瞭には理解していない極めて多くの人々が、この悪故に苦しんでいるのである。これらの人々が、私が前に語った目立たぬ英雄達で、進歩の可能性を条件づけるのである。これらの人々が、組織化される党派の現実的基盤である。党が組織されるのは、それが極めて多くの諸個人——党が敵として立ち向った悪のために苦しんでいるからこそ、党の諸要求に応じなければならないし、党に手を差し伸べなければならない諸個人——の存在について知っているからに他ならない。これら多数の苦しみあえいでいる人々——より良き未来の目立たぬ維持者達——が、直ちに自分達の味方を認めず、彼等に不信の念を抱き、且つ洗練された批判的思考に基づいて開始される闘争の中に、彼等自身が莫然たる欲望と信仰によって本能的に呼び求めている闘争を見得ないであろうということは、大いに有り得る。それでは何にもならない。今日ではないにしても明日には不可避的な同盟であるこれらの社会的力との同盟を考慮に置いて、党はやはり組織されなければならない。より良き未来のための闘争の擁護者達は、初めの中は認められず理解もされないが、自己の言葉・自己の行為のすべての面で、これらの同盟者達を、可能性ある同盟者ばかりでなく不可避的な同盟者をも、考慮に入れなければならない。

かくして、党は組織された。その中核は、少数の洗練された・熟考する・精力的な人々で、彼等にとっては、批判的思考は実践と不可分である。彼等の周囲に、それ程洗練されていない知識階級の人々が存在する。一方、党の現実的基盤は不可避的な同盟者達——党が敵として戦かうために組織された悪故に苦しんでいる社会的諸集団——の中にある。個人的見解に於る本質的なものと本質的でないものとの明確な区別は、党内活動の自由並びに党外に対するその寛容を決定する。本質的でないと認められた諸論点で、党员達がいかに意見を異にしていようとも、彼等は矢張り将来に於る有益で不可避的な党の同盟者である。すべての党员は、本当の党员も可能性ある党员も、皆党の保護下にある。党組織に加入したすべての思索する個人は、現在既に党に所属している者のためばかりでなく早晚党に加入する可能性のある者のためにも当然の弁護者となる。弁護者は、自己の被保護者の問題

歴史書簡

を歪めてはならない。彼は唯、実際に被保護者の利益になることをすべて提示し、害になることについては一切沈黙するだけである。この沈黙は嘘偽ではない。何故ならば、敵の諸党派も、相手を容赦しないし又容赦してはならない自己の弁護者を有しているから。明白に真実を歪曲する弁護者は、そのことによって、自己の旗印をも、又賢明で誠実な弁護者としての自己自身の威信をも、傷つけるだけである。然し、敵により都合の良い論拠を示唆するような弁護者は、全く弁護者の資格がない。党員の相互弁護、これは、党の最も強力な紐帯であり、敵に対する最も精力的な抵抗である。これは、組織された党派にとって、まだ党に加入していない人々を党に引きつける最良の手段の一つでもある。統一的思想・統一的目的が党派の内部的力を形成するように、相互弁護は、党派の外部的力を形成する。

問題が本質的なものである場合には、党員の活動の自由と党外の人々に対するその寛容は解消する。党員であってこれを犯した者は、最早党の一員ではなくて、敵である。党外の人々の中で本質的な諸問題で党と意見を異にする者も、矢張り党の敵である。党は、これらの敵に対しては、一致協力あらゆる手段をつくして戦い、攻撃を集中しつつ、組織の全力を傾けて立ち向うし、又立ち向はなければならぬ。各党員は、正式の同盟者及び可能性ある同盟者達の当然の弁護者である。全く同様に彼は、敵と認められた者全部に対する当然の検事である。この場合も、真実の歪曲は要求されない。それは誠実な検事の義務では全くない。要求されるのは、敵の実際の失策に注意を払い、一切の告発すべき罪状をあげき出すことである。被告を弁護するのは弁護者の任務である。弁護者の明らかに公平を欠いた弁護が彼自身の意に反した効果を生ずると同様に、余りにも末梢的な告発は、注意深い公衆の見所では、被告の事件を助長し、且つ告発者の威信を傷つける。然し、敵の過失を見落とし、その失策を隠す手段を敵に与えることは、党人の任務と完全に矛盾する。思想の統一が党の生命の基礎であり、党員の相互弁護が党の紐帯であるのと同様に、敵との毅然たる慎重な闘争は、党の生命のあらわれである。

かくして、社会的力の成長は、先ずか弱い孤立した個人から始まって他の人々の共鳴する所となり、次いで彼等の無秩序な協力へ進展し、終には闘争に方向と統一を与える党派が形成されるまで発展してゆく。勿論、この党派は、そこで他の諸党派と出会い、そして、勝利についての問題が、数と方策の問題となる。どこに、より多くの力があるか？どこに、より賢明で、より理解が深く、より精力的で、より老練な諸個人が存在するか？どの党派が、最も良く組織されているか？どの党が、最も良く状況を利用でき、最も良く味方を擁護し、敵を制圧し得るか？ここでは既に、組織された諸勢力が戦っており、従って、歴史の関心は、それらの旗印に掲げられた諸原則に集中される。

——ここで語られていることには新しいものは全然ない、こんなことなら前から知っている、——と読者は云うであろう。

若し、君がそれを知っていたのなら、大いに結構だ。歴史の中に、くだらぬ小話や作り話を探しても何にもならない。然し、過去はどうであったか、現在はどうであるか、将来どうなるかは、歴史において識り得るのである。社会的諸形態に対する個人の闘争と社会に於る諸党派の闘争は、最初の歴史的な社会的組織と同様に、その発生は極めて古い。私は唯読者に、社会的諸形態の巨大な力に対するか弱い諸個人の闘争の諸条件、文化的習慣

と慣習に対する思考の働きかけの諸条件、文明の激湍たる発展の諸条件——これらの諸条件に関する古い真理を想起していただきたかったのだ。批判的思考を涵養した諸個人は、正にそのことによって、進歩の活動家たる権利、老い果てた社会的諸形態と戦う権利を獲得した。この闘争は、有益であり、且つ合理的である。然し、諸個人は、それにも拘らず、可能性ある進歩の活動家たるに過ぎない。彼等が進歩の眞の活動家となるのは、彼等が闘争する能力を持ち、且つ、無に等しい個人から思考の代表者たる集团的力になり得る場合だけである。このための手段は一つしかなく、歴史はその動かしがたい証拠を示している。

(未完)